



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	高倉教授の業績
Author(s)	矢島, 武; YAJIMA, Takeshi
Citation	北海道大学農経論叢, 20, 245-246
Issue Date	1963-11
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/10820
Type	other
File Information	20_p245-246.pdf



高倉教授の業績

矢 島 武

高倉新一郎先生は明治 35 年 11 月 23 日北海道十勝国帯広で生を享けられた。当時帯広には小学校までしかなかったので、小学校卒業と同時に笈を負うて札幌にでられ札幌一中、ついで北大予科、北大農学部農業経済学科にはいられ、大正 15 年 3 月、目出度く農学士になられた。先生が農業経済学を専攻され、その研究と教育ひいてはエクステンションに一生を委ねられるに至った契機は決して単純なものでないと思われるが、わたくしは、少なくとも次の二つのことをここで指摘したい。

その一つは、先生が少年時代をすごされた時代の十勝という環境である。北海道の農地開発は、周知のように、西南部より東北部に向って行なわれた。先生が生を享けられ、少年時代をすごされた明治 30 年代から大正初期にかけ、あたかも、十勝平野に農地開発が盛んに行なわれるに至ったのである。自らが滋賀県からの移住者の子弟であられた先生は、農地開発という現実の中で多感な少年時代をすごされ、農地開発とは如何なるものかを体験されたのである。その中で依田勉三翁の率いる晩成社の移民団の苦闘の歴史や農地開発に伴って生ずる色々な社会問題、例えば旧土人に対する政策とその始末など、高倉少年の心をとらえて離さなかったのではなかろうか。先生がものごとを歴史的発展においてみられようとする態度は、こういった環境の中で育まれたのであろう。「アイヌ政策史」はその後大著として上梓され、昭和 20 年農学博士の学位をえられた。

その二は、何といても、先生が入学された頃の北大農学部農業経済学科、とりわけ高岡熊雄博士との出会いと、その博士からえられた大きな影響である。札幌農学校そして北大農学部は、周知のように、北海道の農業の開発という特別の使命を帯びて設置されたものであった。そして少なくともその当時まで、北大における研究の中心は土地制度あるいは土地経済問題にあった。佐藤昌介先生のアメリカの土地制度史の研究、新渡戸稲三先生の日本の土地制度史をはじめとし、中島九郎先生のアメリカの土地問題の研究、上原轍三郎先生の北海道の土地制度史の研究など、何れもこの系列に属するものだ。そして当時学界の

主流をなしその頂点に立っておられたのが高岡博士である。先生はこの高岡博士から歴史的、制度史の研究につき最も多くのもを吸収され、受継がれかつこれを最もよく発展せられたといえよう。こういった意味で先生は、高岡博士の名実かねそなえた高弟であられたのである。この関係は大学という公式の場を通じてのそればかりではない。先生の先考の札幌のお宅が高岡博士のすぐ近所であつたことや、先生自らも長く高岡博士の近所に住われ、高岡博士の御逝去に至るまで、公私にわたり親しくゆききされたということも大きく関係している。子弟の情の濃かなること、礼の正しきことまことに推服にたえぬものがある。

先生の学問的業績は、先にかかげた「アイヌ政策史」をはじめ「北海道拓殖史」その他幾多の論文及び単行書として発表されている。先生の研究の射程はまことに遠く、土地制度史や旧土人に関するものはもとよりのこと、広く文化史全般に亘っている。わたくしは少なくとも北海道の歴史に関する限り、研究者は、先生の業績をたどりあしがかりとせずには一歩も進めないのではないかと思う。こういう意味で先生の存在はまことに学界にとってかけがえのないものである。

先生は、昭和21年9月教授に昇任され、上原徹三郎先生のあとをついで植民学講座を担任された。その後北大経済学部設置準備委員会委員となられ、経済学部の設置に努力され、28年には経済学部教授に配置換となったが、農学部教授も併任され農業開発の講座を引続き担任された。34年には経済学部長になられたが、37年には再び農学部教授に配置換となり、経済学部を併任されるに至った。

先生が教授としてはもとより、部長、評議員、あるいは学生部長などとして大学の発展に寄与されたことは甚大であるが、学外における御活躍も亦まことに華々しいものがある。学会はもとより、各種の委員会の委員あるいは会長、委員長としての職責はまことに枚挙にいとまない。北海道の開発が陰に陽に先生の学識と経験に負うところ多大である。

幸に先生は御健康に恵まれ、還暦をおえられた今も寸暇なき多忙の日々を送っていられる。何卒愈々加餐せられ、学界の先達として後進の指導などにますますお力添えあらんことを祈念する次第である。